The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在日韓国・朝鮮人における巫俗信仰 ： 巫俗と仏教とのシンクレティズムを中心に
Author(s)	許, 点淑
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 101-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

在日韓国・朝鮮人における巫俗信仰

―巫俗と仏教とのシンクレティズムを中心に―

許　点淑

〈要旨〉

論考の動機は、在日韓国・朝鮮人の社会で巫俗信仰が流行しているのは、如何なる社会的背景にあるのか、巫俗を通じて何を求めているのかにある。そこで本稿では、在日韓国・朝鮮人社会での巫俗信仰の意味を再吟味し、その中で、現世利益信仰だけではなく、アイデンティティの再確立をはかる機能をもつものとして、巫俗信仰を取り扱うことにしたい。

この問題は、本国（韓国）の場合と在日韓国・朝鮮人の社会の場合とは違ってくるというところが興味深い。朝鮮寺の最大の特徴とも言える仏教と巫俗との習合という在り方とも絡んでおり、そこには韓国的な要素や日本的な要素、そして独特の要素が見受けられるのである。このような要因を明らかにしようとするのが本稿のねらいでもある。

ここでは、生駒山地の「大興寺」で行われた三つの事例を取上げる。そして、クッを依頼する信者の立場から、つまり、願主の生活史を中心にのべながら、クッを依頼する目的や動機、依頼者の世代と性別、出身、職業などの点から、典型的にみられる信者のタイプを分類してみることにする。

最後に、在日社会における巫俗信仰の意味と機能を論じることによって、在日社会の典型的なものの一つとして巫俗文化を裏付けることができると思われる。また、このような研究が、在日社会だけではなく日本社会を理解するためにも大いに有意義であることも示せれば甚幸である。

キーワード

在日韓国・朝鮮人、シンクレティズム、巫俗、エスニック・アイデンティティ、仏教

はじめに

現在、在日韓国・朝鮮人は約七〇万人に達しており、日本における最大のマイノリティ集団である。その中で三割に近い一九万人の人々が大阪府下に住んでいる。さらに隣り合っている兵庫県と京都府を合せると、全体のほぼ五割近くの在日韓国・朝鮮人がこの地域に集中していることになる。

このような在日韓国・朝鮮人の全てが、巫俗信仰の中心になっているクッ（巫俗儀礼）をやっているわけではないが、日本の全地域の在日韓国・朝鮮人の間では頻繁に行われていると思われる。

これまでの在日韓国・朝鮮人に関する研究では、殆どが政治や偏見、差別などの問題に取り組んでいて、生活文化としての巫俗信仰を取上げている研究はあまり見られない。

そこで本稿では、在日韓国・朝鮮人社会での巫俗信仰や意味を再吟味し、その中で、彼らの民族的アイデンティティの一つの現れとしての巫俗信仰を取り扱うことにしたい。

この問題は本国（韓国）の場合と、在日韓国・朝鮮人の社会の場合とは違ってくるというところが興味深い。またそれは、朝鮮寺の最大の特徴とも言える仏教と巫俗との習合という在り方とも絡んでいる。このような要因を明らかにしようとするのがこの論文のねらいでもある。

ここでは、生駒山地の「大興寺」で行われた三つの事例を取上げる。そしてクッを依頼する信者の立場から、つまり、願主の生活史を中心に述べながら、クッを依頼する目的や動機、依頼者の世代と性別、出身、職業などの点から、典型的にみられる信者のタイプを分類してみることにする。

最後に、在日社会における巫俗信仰の意味と機能を論じることによって、在日社会の典型的なものの一つとして巫俗文化を裏付けることができると思われる。

1　クッと巫堂（ムーダン）

韓国での巫を行う者の一般的な名称は「巫堂」であり、クッは巫堂によって行なわれる巫俗儀礼である。巫堂のカテゴリーには、いわゆる降神巫と世襲巫とがある。降神巫の場合、主に中部以北の地域に分布している。彼らは守護霊の憑依によって巫病状態を呈すると、先輩巫堂について習業をし、入巫儀礼である巫（ムー）クッ（神（シン）クッ）が終わると正式に巫堂になる。

世襲巫は、京畿道、慶尚道、全羅道地方と東海岸などの韓国の南部地域に主流を成している。彼らの殆どが父系巫家系における嫁継ぎの形態である。また、巫堂自身は女性であり、巫家系同志の婚姻が主である。さらに、彼ら世襲巫はクッの中で憑依現象を見せないし、入巫儀礼の時も神掛かりの現象などは見せないのが特徴でもある。

巫堂には地域によって色々な呼び方がある。例えば、全羅道では

女巫を「タンゴル」、「タンゴルネ」と、男を「才人（シェイン）」と呼んでいる。慶尚道では、女巫を「巫堂」と男巫を「花郎（ファラン）」と呼んでいる。済州島では、男女性別を問わず「神房（シンバン）」と呼ぶのが一般的である。この神房たちはその属性、職能の一つとして「占い師」的性格を多かれ少なかれもっていると同時に司祭者としての機能をもっている。入巫の類型もまちまちであって、シャーマンの加入儀礼の場合、それはエクスタシー経験（夢、幻視、失神など）と、霊あるいは年老いたシャーマンの長によって伝えられる教え（シャーマンの方術、霊の名と働き、部族の神話と系譜、秘語など）から成っている。[1] 済州島のシャーマンも基本的にはそうであるが、必ずしもエクスタシー経験をするとは限らない。玄　容駿氏は入巫の類型を次のように分類している。[2]

（1）世襲で入巫する場合
（2）巫具（メンド）を拾って入巫する場合
（3）病気のために入巫する場合
（4）神房と婚姻によって入巫する場合
（5）生活手段として入巫する場合

筆者が一九九二年に調査したケースでは、儀礼の進行は神房五人と僧侶一人によって行なわれ、[3] 神房五人のうち二人が上に挙げた（5）の類に入る。在日韓国・朝鮮人全体についての統計的資料はないが、大興寺の事例では（3）と（5）のケースが目立つと言える。

彼らは入巫するまでは、見習期間（普通二〜三年であるが個人によって違う）はクッの手伝いをしたり、巫楽をもって伴奏の任に当たったり、そうしたなかでクッの過程の中の易しい部分だけの司祭を務めたりする。彼らを済州島では、小巫（ッミ）とかジェビとかヤンジュンとも呼んでいる。大興寺の場合は、クッを依頼する信者たちは神房や小巫のことを、このような呼称はめったに使わずに、親族呼称を用いたり「先生」と呼んでいる。

次はクッの種類と目的についてみることにする。クッは大きく村祭（別神（ルシン）クッ、堂（ダン）クッ）と巫クッ、個人クッと分けることができる。村祭は、村が単位になって村の豊年や安全祈願のために、定期的（毎年あるいは二、三年毎か一〇年毎など）に行なわれるクッである。巫クッは、入巫する時や巫堂が定期的に神を祭る時に行われるクッである。個人クッは、その目的によって病（ヒョン）クッと財数（セス）クッとに分けられる。それらに於いては、家族をめぐって続く病気やトラブル、商売の不調などは、不幸な死に方をして迷っている祖先（先祖）の霊の障礙によって引き起こされると信じられている。そこで、それらの死者霊を諸神と共に迎え降ろして供養し、それらの救済を確認した後、安らかに冥界に送り返すことが中心テーマになる。

在日韓国・朝鮮人の社会では、村祭は殆どみられず、個人クッが主流を成している。またクッが行なわれる時、家族や親戚だけが参加するという閉鎖的形をとっていることが特徴として挙げられる。

1・1　巫俗信仰の概要

韓国では、巫俗信仰の中心であるクッの種類や規模がかなり簡素

化の道を辿っているが、民衆の間では今だに根強く伝承されつつある。その例として、巫俗儀礼の中心人物である巫堂の数をみることにする。大韓勝共警信連合会の報告によると、一九八五年現在の韓国内の巫堂の数は一二万と推定され、正式に登録されている数は四万程度である。[4] 最低四万程度であるとして、人口一千名当たりに巫堂一名という割合になるだろう。一方、巫俗のふるさととも言われる済州島では、巫俗が済州人の生活様式の重要な部分を占めている。これは、神房の数が三七三名で、当時の済州島人口二六八、七四〇名に割当ててみると、七二〇名当たり神房一名の割合になることからも分かる。[5]

在日韓国・朝鮮人の約七〇万における巫堂の数は未だ把握されていないが、大阪だけみる限りでは、現役の巫堂は四〇～五〇名はいるだろうということである。[6] 在日韓国・朝鮮人の社会（特に大阪）に於いても、巫堂の数の上では巫俗信仰が衰えていると言えるのかも知れないが、クッの内容からみると、本国よりも原型を保っているところが大きな特徴でもある。さらに、クッが頻繁に行なわれていることも見逃せない。

在日韓国・朝鮮人の生活文化の中にシャーマンが出てくるのは、

「日本の産業の最低辺を支えさせられた同胞の労働者が単身でやって来て、後に家族を呼び寄せ始めた一九三〇年代からだと言える。家族たちの渡日につれて巫覡たちの在日も始っている。大阪府の学務部社会課が一九三二年の六月から十二月にかけて行なった、大阪市内に一戸を構える朝鮮人世帯一〇、八三五戸に対する生活ならびに生計調査書『在阪朝鮮人の生活状態』によると、職業統計欄に宗教を専業とする者の数として、牧師一、布教師三、僧侶二、神占師二、巫子（シャーマン）一と出ている。巫者一というのは、植民地当局が巫教を未開の習俗・迷信として排斥していたことと、巫覡を蔑視する朝鮮の身分制度のために、正確を欠いた数であり、実際にはもっと多くの巫覡が同胞たちの生活に繋がっていたと考えられる。[7]」

また、泉　靖一氏の東京における済州島人の調査では、

「…病気または凶事に対する神房の行事がしばしば行われる。X地区には三人の神房がいて済州島人の要求を満たしている。行事に用いる太鼓や鐘は済州島のそれとほぼ同様である。しかし、神房たちは、神房であることに劣等感を抱き、他の人々にひたかくしに隠している。済州島本来の神歌や本解は殆ど忘れられているが、行事の進め方、入巫過程などは本島のそれと変らない。神房の支持率は我々の調査では男の〇パーセント、女一四・三パーセントという結果が出ているが、実際にはおそらく女の支持率はさらに高いものと考えられる。[8]」

と、報告しているが、筆者の調査（一九九〇年～一九九一年の数回）の結果と違うところは、クッの支持率においてである。

大興寺の場合、クッを依頼したり、その場に参加したりするのは女性が中心になっている。男性の場合は、現世の利益追及のため直接クッを依頼して参加するケースもある。あるいは、自分の母や妻を通じてクッを依頼する形を取る。クッの費用は、規模が大きい場合は一〇〇万円も二〇〇万円もするので、女性単独では容易にでき

ないのである。このことは、本国の場合、個人クッに男性が関与することは先ず考えられないことと対照的である。

1・2　朝鮮寺の概要

朝鮮寺は全国的に見渡すと、在日韓国・朝鮮人の足の運びやすい山麓に多く所在している。例えば、神戸の六甲山や大阪と奈良の境目にある生駒山地がそれである。

神戸の六甲山の場合、一九九〇年六月現在、七つの朝鮮寺（聖徳寺、法城寺、宝教寺、大井寺、金峯寺、普徳寺、最明寺）があることが知られている。この中で、クッの行事を否定しているところは大井寺（高野山真言宗大師教会）だけである。また六甲山は、後述する生駒山地と谷の地理的条件が似ている。

生駒山地の場合は、特に大阪に面した西側の谷沿いには、それぞれ四ないし九の朝鮮寺が連なって建っていて、おおよそ六三を数えている。[9] その他にも、大阪の生野区や京都、兵庫の街中にも四〇近くの朝鮮寺があり、関東や九州方面にも幾つかあることが報告されている。[10]

「在日韓国・朝鮮人における巫俗儀礼」では、このように朝鮮寺が生駒山地に密集している理由として、大阪とその周辺には在日韓国・朝鮮人の居住者が多いことを挙げた。[11] また、交通の便の良さも付け加えることができる。最も重要な理由は、生駒山地が本来宗教性の強い地域であることである。種々の宗派の寺社や教会、民間医療施設などが密集しており、これらは相互に干渉することなく並存しているので、朝鮮寺をはじめ、新しい宗派の定着を容易にしている。[12]

これらの朝鮮寺は、戦前に創設されたのはごく小数であって、その大多数は昭和二〇、三〇年代に形成されている。[13] また、創設者の殆どがシャーマンでもある。しかし、このシャーマンたちは高齢のため後継者問題に直面している。そこで、後継者のいない寺では、閉寺になったり、クッの場所として提供したり、寺の性格を変えるなどといった方法をとって存続させているのが現状である。クッの場所を提供する場合は、韓国の方から巫堂と僧侶を呼んでいる。

一九八三年現在、生駒山地にあるおおよそ六三の朝鮮寺の住職を、その出身別、性別にまとめると次のようになる。出身別では、済州島が一七人で一番多く、慶尚道が一五人、日本生まれが二人、その他の地域が二人、未詳が二人の順になる。性別では、女（三一人）、男（二三人）、夫婦（一組）、未詳（八人）の順になる。また、住職のうち、シャーマンが三〇人、僧侶が二一人、その他一二人である。[14] ここで、朝鮮寺の住職は、済州島出身の女性のシャーマンが多いということが言える。

次は、住職とクッとの関係をみていくことにする。生駒山地の朝鮮寺の場合、大体四つにまとめることができる。

（1）現役でクッをしているシャーマンが住職である寺は、二〇を数えている。これらの寺は、いずれも戦後に創建されているという特徴がある。

（2）かつてはクッをしていたが、現在は高齢化のためクッができ

なくなった退役シャーマンが住職である寺は、二〇を数えている。この場合は、他のシャーマンがクッを行なう時、場所を提供したりする。

（3）住職自身はクッを否定しているが、色々の事情からクッの場所を提供しているところが五箇所である。

（4）その他、不明なところ。[15]

以上でも分かるように、生駒山地の殆どの朝鮮寺ではクッが行われている。ただし、その関わり方は、住職の直接参与とクッの場所提供とに大別される。

今度は、朝鮮寺の形態面での特徴に注目してみたい。朝鮮寺は外観上は寺の形をしているが、クッを行なうための場所を持っているところが多い。通常、それは「クッ堂（グン）（賽神場）」と呼ばれており、普段はシャーマンと依頼者の宿泊施設としても使われている。また、神仏の性格や安置形式においては、韓国仏教式である。しかし、韓国仏教の伝統が定める様式からはかなり変容し習俗化している。

それどころか、宗派の名乗りになると日本系と韓国系とが混在している。日本系は真言醍醐派や金峯山修験本宗などを、韓国系は曹溪宗を名乗るのが主である。数的には日本系の宗派を名乗るものが多い。

このように朝鮮寺は、仏教の面では韓国系と日本系が混在して、それも変容していること、さらに巫俗と共存しているところがその特徴である。次節では、仏教と巫俗との共存の問題をシャーマンと信者、僧侶の、それぞれの立場から眺めて行くことにする。

2　仏教と巫俗とのシンクレティズム

2．1　シンクレティズムとは

人類学や宗教学では、シンクレティズム（Syncretism）を「二つ以上の異なる文化（特に宗教文化）が接触して生じる様々な状況・現象」[16]であると、定義している。この二つ以上の異なる文化が接触すると、融合・併存・混合・折衷などの形として現れる。しかし、実際には様々なレベルで複雑化していると考えられる。

その一例として、L・ランカスターは韓国の事例を挙げている。「韓国の仏教とシャマニズムは俗人のレベルにおいてのみならず、寺院の中においても絡み合っているが、しかし僧院の中にはシャマニズム的伝統とは完全に一線を画した修行を守っているものもあるという。また、韓国の家族における性や地位の差異が仏教、儒教、シャマニズムのシンクレティックな関わり方に示されるという。すなわち上層家族の男性が仏教と儒教を代表するのに対して、同じ家族の女性成員はシャマニズムに包含されているとする。[17]」

ところが、朝鮮寺における仏教と巫俗とのシンクレティズムは、本国（韓国）と同じ軸ではあるが具体的なところでは異なる。以下では、韓国内の仏教とクッとのシンクレティズムの問題にもう少し詳しく触れたうえで、日本内の朝鮮寺におけるそれと比較検討を試みる。そうすることによって、在日韓国・朝鮮人社会の仏教と巫俗に対する受け止め方の一端が浮び上がると思われるからである。

2．2　韓国における仏教と巫俗とのシンクレティズム

2．2．1　巫俗の仏教受容

ここでは、韓国の在来の伝統的な宗教現象である巫俗と、外来宗教として最も古い仏教との相互習合の関係を明らかにする。先ず、巫俗の仏教受容をみるために、巫俗の中に仏教要素がどのように絡んでいるかをみることにする。巫俗の構成要素は、（1）信仰対象になる神、（2）神に捧げる祭儀、（3）祭儀を主観する司祭者、（4）神観・宇宙観・霊魂観・人間観などの宗教的思考体系、（5）信者の宗教的態度、などに集約することができる。

信仰対象になる巫神は、自然神と人間神とに大別される。自然神は天神・地神・山神など自然物が対象になり、人間神は、王神・将軍神・英雄神などである。また、釈迦や僧侶などが神として信仰される。この釈迦と仏教的神格らは巫神図に描かれていて、他の一般的な神と一緒に神壇に奉安されている。また神壇には仏像が奉安されることもある。このようなことは、仏教が巫俗に与えた影響と思われる。

次に神に捧げる祭儀は、クッを行なうことである。クッの過程で、特に、帝釈では、「巫女は白い僧衣状の服を着用し、巫歌の中にも念仏や西方讃および道場偈が用いられる。また死者の霊を供養するための賽神儀礼（クッ）では、十王（シワン）に対する唱文や極楽への往生のための経文類が用いられる。儀礼ばかりではなく、巫祖神話の本解（ボンプリ）の中にも仏教の要素がみられ、とりわけ、巫祖の父を仏僧とする説は、巫俗と仏教との古くからの密接な交渉をよく反映していると言えよう。[18]」

祭儀を主観する司祭者は巫堂であるが、成巫の契機によって降神巫と世襲巫とに分かれる（1．1参照）。そして、司祭者の巫堂が仏教の影響を受けている例として、降神巫の場合、降神体験の後、神（シン）クッをしてシャーマンになってから、未だ巫俗の正式なクッができない間、自分をポサルとか法師と自称して、仏教的色合いを身にまとおうとするシャーマンがいることが挙げられる。

宗教的思考体系については、神によって宇宙や森羅万象が運用されるし、人間がこの世に生まれ、死ぬことも神によって定められると信じられている。また、霊魂は不滅なので、生前に悪行を起こした人は地獄に落ちるし、生前に善行をした人は極楽に行って永生すると信じられている。このような宗教的思考体系は、仏教が巫俗に与えた影響であると考えられる。これは、仏陀をはじめ仏教的神格が巫神として祭られることからも分かる。その他に、巫俗の人間観において、人間がこの世の中に生まれるのは、産神（サムシン）の役割によると考えられているその一方で、帝釈様や仏陀が申し子を与えると信じられているところにも仏教の影響が表われている。

次に、信者の宗教的態度をみよう。信者は神に捧げるクッによって祈子・治病・招福・来世などを解決しようとするし、またクッをすることによって、それがかなうと信じている。さらに、信者にとって神は全能な存在であって、その性格や所属を一々問題にすることはない。つまり、天神・山神・仏陀・帝釈など、対象の神のレベ

ルにおいては、巫神と仏教の神格との境界がはっきりしていない。

以上見てきたことから分かるように、巫俗の中には仏教的な要素がかなり混在していることが分かる。次のセクションでは、逆に巫俗が仏教に与えた影響について考察することにする。そうすることによって、巫俗と仏教の関係の全体像が浮び上がるだろう。

2．2．2　仏教の巫俗受容

仏教の巫俗受容には、信仰の対象としての山神と信者の宗教的態度が挙げられる。山神図は、虎を眷族として従えた白髪の老人の姿で描かれている。韓国の大部分のお寺では、本殿の裏手の小高い所に山神閣や七星閣が設けられて山神図が掲げられている。この山神図は、巫俗に用いられるものとは差がない。この山神閣や七星閣は、本来韓国の伝統的な山神が仏教に取入れられて以来、今日に至るまで民間の重要な信仰対象になっている。

仏教儀式の神衆作法の中の、山神・龍王神・門神・井神・土神・海神・日月神なども、韓国在来の民間信仰や巫俗信仰と合致している。つまり、仏功（フルゴン）の対象になる神は仏陀だけではなくて、場合によって、上に挙げたそれぞれの神が対象になる。例えば、災難の時は「山神仏功」、祈子の時は「七星仏功」、海上に関係する時は「龍王仏功」というように、民間信仰ないし巫俗信仰との習合の形になる。

特に、死者の薦度祭儀である四十九斉や百日斉は、巫俗のオグクッと十王クッと大変類似している。また、仏殿に食べ物やお金を捧げて、幸運や治病、財運発願などを祈願する仏功は、シャーマンの財運クッや病クッ、産神クッなどに比較される。

信者の信仰的態度は、巫俗の祈福的な信仰観の延長線の上に仏教を位置づけようとする。というのは、シャーマンを呼んでクッを依頼する人でも、お寺に行って祈願の仏功をするのである。このような、仏教と巫俗とをはっきり区別しない態度は、学歴や知的水準のそれほど高くない信者によく見られる。

2．2．3　巫俗と仏教との習合の要因

前節では、巫俗と仏教が相互に影響し合う諸相をみてきた。ここでは、それらを生み出す要因は何かについて述べたい。

巫俗と仏教が摩擦なしに習合されたのは、前者が共通の宗教的分母を有しているからであると思われる。巫俗の基底には、神聖に基づくこの世とあの世、生と死、あるとないなどの区別を明確にしない未分的心性がある。それらは、絶えることなく循環するものであるという思考体系にまとめられる。

仏教の場合も、来世と業報の輪廻の重視、禅を通じて空に到達できると強調するなどに、未分的思考体系がみられる。このような共通性が、巫俗と仏教との習合を容易に促した大きな要因である。

次に考えられるのは、仏教が韓国的宗教の下地の上で、布教され成長する過程である。仏教は、在来の民間信仰や巫俗の要素を吸収しながら布教されてきた。巫俗の方からも、仏教の宗教的威信や組織性などに習って、仏教的要素を取入れるようになった。

2．3　朝鮮寺におけるシンクレティズム

1．1．2でも述べたように、朝鮮寺は仏教的形式のお寺ではあるが、クッ堂をもっていることが最大の特徴である。また、殆どのお寺ではクッが行なわれているし、その時、シャーマンに加わって僧侶が参加していることも特徴づけられる。その具体例として、大興寺の事例を取上げて、シャーマン・僧侶・信者の立場からシンクレティズムの問題を考察する。

大興寺は真言宗醍醐派として、住職は金氏（六二才）と玄氏（五六才）の夫婦シャーマンが務めている。そして、韓国からの僧侶（太古宗）の崔氏（三〇才）が雇われている。

先ず境内を覗いてみると、入口から入って右の方に二階建の建物が見える。一階は台所や浴室、倉庫があり、二階には一〇畳くらいの部屋がある。ここは、クッが行なわれる時に使われる巫衣を作る作業室と、信者の多い時の彼らの寝室とを兼ねている。この建物の入口のところに大竿が立てられていて、シャーマンによってクッが行なわれていることを象徴している。入口の左の方には谷があって、その奥には自然石に彫り込まれた不動明王が祭られている。ここをシャーマンと信者たちは龍王堂（ヨンワンダン）と呼んでいる。入口から正面に見えるところ（二階建ての向い）が三〇畳くらいの賽神場（クッ堂）である。ここは、クッが行なわれる時は本堂（法堂（ホウダン））よりも中心になる場所である。浴室・トイレ・流し台・寝具などが揃っているので、特に何日もかかる大賽祭（クンクッ）の時は、シャーマンを始めクッの依頼者や参加者が泊まる場所でもある。

お寺にクッ堂があることは、本国ではみられない朝鮮寺の特色であるのは、既に見てきた通りである。大興寺の住職である金氏は、これに関して、

「済州道では神房（シンバン）（シャーマンのこと）が個人のクッ堂をもっているのは、大変珍しいことである。個人のクッは、主に個人の家か海辺で行なわれるので、色々不便なところが多い。特に、雨が降る時や風が強い時は大変である。しかし、ここは色々設備が整っているのでクッをするのには最適である。」と、語っている。

本堂はクッ堂とは別の建物で、少し高いところにあり、クッ堂よりはやや狭い。中には仏像が安置されており、天井には信者の寄進による五〇あまりの蓮灯が飾られている。

ここで注目すべきことは、信者の性格である。大興寺を訪れる信者は、仏教信者ではなく住職のシャーマンとクッによって結ばれているお客である。住職の話では常連のお客は二〇〇人くらいである。特に、お寺の年中行事である四月八日（釈迦誕生日）、七月七日（七星祭）、一二月二二日（冬至祭）が重視され、信者の一番多い日は四月八日である。この日は四〇〇～五〇〇人くらいの信者が集まり、蓮灯は五〇〇個程を数える。蓮灯は本人が直接参加しなくても親戚や知人に頼む場合もある。

これらの信者は、クッを依頼しなくても奇妙な夢を見たり原因がよく分からないことが起ったりすると、電話での相談をする場合もある。電話での相談は女性シャーマンである玄氏が応える。このことから、現代の複雑な社会で共通に見られるような心理的不安を抱

えている在日韓国・朝鮮人にとって、この相談がセラピー的な役割を果たしていることが分かる。

このように、クッ堂ではクッが行なわれ本堂では仏教儀式が行なわれている点では、巫・仏のシンクレティックな現象がみられる。このお寺の主な行事は僧侶による仏教儀式よりも、シャーマンによる巫俗儀礼である。この儀礼の行なわれる時、僧侶も加わっている。巫俗儀礼が本来もっている仏教的な要素については、前でみてきたのでここではそれ以上触れないことにする。さらに重要なことは、巫俗儀礼に僧侶が加わることが、シャーマン・信者・僧侶自身にとってどういう意味をもつかである。これはひいては在日韓国・朝鮮人のアイデンティティの問題にも関わっている。

先ず、シャーマンの立場からこの問題を考えてみたい。クッの進行は、何人かのシャーマンだけで充分であって、必ずしも僧侶は必要ではない。クッの中で僧侶の役割は、巫楽の演奏や供物の上げ下げの手伝い程度であって、これはシャーマンでもできる仕事である。それでは、シャーマンが僧侶をクッに参加させるのは何を狙ってのことであろうか。

韓国での巫俗は、朝鮮時代に階層化された社会において蔑視され迷信視された。また虐げられた人々の間で行なわれたため、巫俗が宗教として認められずに今日まで至るようになった。在日韓国・朝鮮人の間での巫俗もその延長線として考えられる。そこで、巫俗が高等宗教と認められる仏教の形を借りることによって、宗教としての権威を強化し正当化しようとした。クッを行なう時に僧侶を参加させるのはその現われであり、在日巫俗の特徴でもある。

I・M・ルイスは「安定した政治的地位が存在しない非常に小規模の社会では、シャーマン自身が人間同士のおよび人間と精霊との交流をする、全能的な権能者として君臨する。[19]」と述べている。このように、在日韓国・朝鮮人が日本社会の中で小規模の民族集団であり、また、政治的地位が認められていないことから、シャーマンは仏教を取入れることによって巫俗のレベルアップを計ると同時に自らカリスマ的存在として信者の間で君臨していると思われる。ごく一例を挙げると、信者たちはシャーマンのことを〝先生〟〝ボサル様〟あるいは親族呼称である〝お姉さん〟といった尊称をもちいて呼んでいる。また、信者は大阪とその周辺だけではなく、東京・名古屋・九州・北海道まで分布している。大阪とその周辺の場合は大興寺でクッを行なうが、それ以外のところはシャーマンのグループ（僧侶を含めて）がそこまで出掛ける。

このように、シャーマンが僧侶を雇っていることと本堂よりはクッ堂が中心になっていることから、仏教が巫俗に習合していると思われる。

次は、僧侶の立場から考えてみる。谷　富夫氏は、

「…日本においても、韓国系の宗派に属している男僧は賽神をしない。韓国仏教は、巫俗を迷信とみなして否定する立場から、『国民風俗』ととらえてそれがもつ国民精神の統合機能を評価する寛容な立場まで、いろいろあるようだが、ともかく、みずから巫俗にかかわることだけは戒められている。私たちが出会った何人かの韓国

正統派の僧侶はみな、寺で賽神をすることは好ましくないし、自分自身はやらないと話していた。[20]」

と報告し、実際は僧侶がクッを黙認していると指摘している。大興寺の僧侶崔氏は、一九九〇年三月済州道から来ている。韓国仏教の正統派である太古宗の出身である。来日の目的は、建て前は韓国仏教の布教であるが、本音は経済的理由である。というのは、韓国では法師になるため仏教大学に進学するのを志していたが、経済的理由で諦めるしかなかった。この事情をよく知っていた崔氏の師匠が、ちょうど金シャーマンから頼まれていたこともあって、崔氏を紹介してあげたそうである。

崔氏は、来日する前からシャーマンが住職であると知っていた。実際、クッを否定しつつも参加しないといけないというのが、内心苦しいところである。それより、いずれ本国へ帰ることが気になるようである。本国の仏教界でも、朝鮮寺の事情がある程度知られているので、滞在期間が長くなると疑われる恐れがあると心配している。

ここからも、朝鮮寺における巫俗と仏教とのシンクレティックな現象は、仏教の方からの要請ではないことが見える。むしろ仏教の方はこれを拒んでいて、巫俗の方（信者をも含めた意味で）はこれを積極的に望んでいると言えるかと思う。

もう一つ、日本の宗教的な風土から言えることがある。大興寺の場合、日本の修験道系の宗派である真言宗醍醐派に所属している。住職である金氏と玄氏夫婦は、律師の資格を持っている。このことは日本の民俗宗教によくみられるものである。それは、「…シャーマンが一人前の職能者として商売を開くとき、自らの立場を正当化するために大教団から布教師や教師の免許を取得し、成立宗教の傘下に入ることがすこぶる多い。[21]」と指摘されているように、あくまでも名目上の所属である。いずれも教義の布教よりはクッによる現世利益行為に主眼が置かれていると思われる。日本の宗教的な風土が朝鮮寺の在り方にも影響を及ぼしていると言わざるを得ない。

今度は、信者の方からこの問題を考察してみたい。信者の場合は、宗教に対する境界意識が希薄であって、巫俗であれ仏教であれ韓国的なものを求めていると思われる。しかし、巫俗と仏教に対して求めているのはそれぞれ違う。

在日韓国・朝鮮人の場合も、巫俗を見下げる意識は本国と変りはない。そういう意味で、朝鮮寺が外観上お寺の形式であることは、信者にとっては都合のいいことである。クッ堂に行くということより、お寺に行くという方が気楽であろう。また、クッの場面に僧侶が同席して、さらに「仏経」をも読経することは、信者に安心感を与える効果があると思われる。

以上、朝鮮寺における巫俗と仏教とのシンクレティズムの問題を、シャーマン・信者・僧侶それぞれの立場から述べてきた。巫俗が仏教的な要素を取入れているのは、基本的には本国と変りがない。しかし、クッ堂と本堂が共存していることや僧侶がクッに参加していること、シャーマンが日本寺の律師資格を取得していることなどは、朝鮮寺の本国の巫俗と大いに違う点である。また、それらはシャー

マンの方からの一方的な要求ではなく、信者の方からも望まれていると言えるだろう。さらに、このようなシンクレティックな現象が、日本の宗教的風土の中で成り立っているのも注目すべきである。

このように、朝鮮寺は巫俗本来の在り方を保ちつつ、日本という土壌の上で独自の在り方をも見せつつある。これは、日常的な空間としての本堂と、非日常的な空間としてのクッ堂の共存し合えるメカニズムを生み出しているのである。

3　クッの依頼者のタイプ

在日韓国・朝鮮人は皆クッをしているわけではない。ある程度経済的な余裕があり、特に一世など、異国生活での本国に対する懐かしさを味わいたい人が主である。二世・三世の場合、クッに参加するのは何より一世の影響が大きい。一世は、日本に来た当時の韓国ではクッが盛んであったことを経験している。

大興寺の場合も信者層は一世が中心になっている。また、一世を中心とするネットワーク（親戚・知人・同郷など）が広がりつつある。最近は日本人の信者も増える傾向にある。

以下では、私がこれまで見てきた事例のなかで、特に典型的であると思われる三つの事例を取りあげ、クッを依頼する動機や依頼者の属性について考察する。そうすることによって、どういう人がどういう目的でクッを依頼するかが分かるであろう。

事例1

この事例は、一九九一年六月三〇日から七月四日まで五日間行なわれた。本主（依頼者・祭主・願主などの言い方があるが、以下では実際クッを行なう時に使われる本主という用語を用いる）は、奈良市中山町に住んでいる七九才の在日一世の女性である。彼女は三四才の時夫を亡くしてから、一人で長男（五九才）と長女（五二才）を育ててきた。長男は三人の息子（三三才・三一才・二七才）の生活について色々悩みを抱えている。このうち三一才の次男が、一九九一年四月家出をした後消息を断っている。長女の場合は、裕福な家庭で二人の息子がアメリカ留学中である。

今回クッを依頼するようになった動機は、本主が前に体の調子が悪くてプダッコリ（小さいクッのこと）を行なった時、色々な家系事情に原因があることが分かったからである。というのは、先祖の中に神房がいたということと、亡くなった夫が生前、生活のために古物を拾う仕事をしており、その彼が瓦で蛇をころしたことがあるということである。そういうことがあって、本主は前から首が切られた蛇の夢をよく見たと言う。そこで、今度のクッを通じて先祖と蛇の霊を慰めることにした。また、家出をして消息を断った孫が一日も早く帰ってくることをも願ってのクッである。

こういうわけで、どうせクッをやるなら大きい規模の方が、先祖の霊を慰めて生きている子孫のために良いというふうに話がまとまった。クッが行なわれる間、本主はクッ堂に泊りながらシャーマンと行動を共にした。特にシャーマンの占いやヨンゲウルム（口寄せ）

をする時は真剣になっていた。そして、クッの途中でシャーマンの指示に従い拝礼をしたり泣き出したりした。長女の方もクッに対しては肯定的である。彼女は普段から胸が息苦しくて病院にも行っているが、病名が分からないままである。しかし、クッをした後は気分がすっきりするそうである。彼女は、「私が先祖に拝んだからといって、それだけを信じたらあかん。ある程度は自分で努力しなきゃあかん」と言いながら踊りに夢中になっていた。

この五日間のクッの費用は一六〇万円くらいである。その費用は全て長男が払っている。また来年（一九九二年）には、もっと大きいクッ（七〜一〇日間くらいで、予算は三〇〇〜五〇〇万円くらい）を依頼する予定である。

事例2

この事例は、一九九〇年五月一七日から二四日まで八日間に渡って行なわれた。クッの本主は、東大阪市で印刷工場を経営している四七才の男性の母親である。この男性の父親は、一八才の時来日して苦労をしたあげく二五才の時行方不明になった。これは、彼が生まれる直前の出来事である。そこで彼は貧しい生活に耐えながら母のもとで育てられてきた。学生時代は印刷工場でアルバイトをしながら勉学に励み、現在はある程度安定した生活を送っている。しかし一年くらい前から精神的な異常が起こり、病院にも通ってはいるがなかなかよくならないのでクッをすることに決めた。クッを行なう直接のきっかけになったのは、彼の叔父の進めである。叔父は数年前、金シャーマンにクッをやってもらってからは家運がよくなったそうである。

クッの間に、すでに日本に帰化している本主の長男夫婦と、一九才の時日本で道路工事中亡くなった四七才の伯父（本主の息子）のことが問題になった。シャーマンの話では、長男の夫婦が帰化した後は故郷の先祖のお墓参りもしていないし、また先祖への供養をおろそかにしたので、先祖が凄く怒っているということである。特に、この家はお墓の山神が強いと付け加えられた。また、不幸な死に遭った伯父の霊をクッを通じて慰めるべきであると言っていた。

事例3

この事例は、一九九一年五月二二日から二九日まで八日間行なわれた。本主は七九才（男性）の会社社長で、五人の息子が社長（二人）・医者（二人）・弁護士（一人）の仕事に携わっていて、家庭的には別に悩みを抱えているわけではない。本主は五九才まではクッについて大変否定的であった。しかし家運が悪くなってきた時、クッをやったら事態が良くなったので、それ以来は三〜五年毎にやっている。一回のクッの費用は五〇〇万円程度で、先祖への供養が目的である。今度の大興寺再建の時（一九九二年）には大手のスポンサーになった。

以上、三つの事例は在日社会でよくみられるタイプである。三つの事例とも本主が在日一世であるという共通点が挙げられる。その

うち、女性が二人で男性が一人である。この数字を以て、在日社会全体の傾向を結論づけるのは難しいと思う。しかし、女性を中心にしながら男性の場合もクッを依頼していることは分かる。また、正確な統計はでていないが、本国への行き来の少ない人がクッを依頼する場合が多いということである。それは、本国では最近クッをやらなくなっている事情をよく知らないことと関連しているかもしれない。

4　在日社会における巫俗信仰の意味と機能

巫俗文化は、本国においては衰退の一方におかれている。当然、巫俗信仰に対する人々の考え方も厳しいものである。しかし、在日韓国・朝鮮人の社会ではそのような傾向は見えず、むしろ流行していると言えるかと思う。このような開きは、どのように説明できるのであろうか。この疑問に答えられるものとして、以下の事柄を挙げよう。

先ず、先祖崇拝の観点からみることができる。本国での先祖崇拝は、男性を中心にする儒教と女性を中心にする巫俗とが、その役割を果たしている。特に、巫俗信仰の場合は供養する先祖の範囲が儒教よりも広いのである。在日韓国・朝鮮人の社会でも基本的には本国とは変わらないが、巫俗の役割は違ってくる。在日一世には、異国で苦労をしたあげく、不幸な死に方をした人が多くみられる。彼らのなかには、現在の耐えられない悩みは本国の先祖のお墓参りをちゃんとしていないことに起因するという考え方がみられる。これらを解消するためには先祖への祭祀だけでは充分ではない。そこで、巫俗が機能する理由が成り立つのである。巫俗では先祖の供養さえすれば、子孫に福を与えたり、運をよくしたりできるという考え方がある。この二つは、お互いに絡み合っているので切り離すことは出来ない。

心理人類学者である G. Devos によれば「ある集団の民族的アイデンティティは、その集団成員個々の判断によって、自集団の文化の何らかの側面を象徴的に表わすものによって成り立っており、それを共有する者に対して一体感をもち、それによって自集団を他集団から区別しようとする。[22]」と述べ、さらに、「エスニシティーとは、その言葉の最も狭い意味では、過去と連なっているという感情であり、個人の自己規定の本質的部分として維持されている感情である。またエスニシティーは、集団の連鎖性に対する個人の欲求に密接に連なっている。それは集団の歴史的連鎖のなかでの個人の生存感覚を包含している[23]」と述べている。このような説明の中には自己規定によって自集団の文化から民族的アイデンティティを選択していることが指摘されている。また民族的アイデンティティを感情として捉えており、その感情が自己規定の本質的部分になっている。

民族を決めるものは、状況と条件によって異なる。例えば、在日韓国・朝鮮人の場合、出身と出生が基準とされる。在日韓国・朝鮮人二世や三世の場合、言語や生活様式、態度に関しては日本人と異なるものではないし、身体的特性までも日本人と区別がつかない。

しかし、日本人は国籍が日本人ではないと、戸籍上朝鮮半島からやってきたことを基準に在日韓国・朝鮮人に接する。

巫俗信仰は、本国では伝統的な要素が強い文化的様相である。長い歴史の過程の中で巫俗は、迷信視・差別・打破の的になり続けてきた。三国時代や高麗時代には仏教という宗教に、朝鮮時代には儒教という合理主義に、開化以降は科学思想に押さえられてきたのである。最近になって、国際化の時代を迎え、もっとも韓国的なものとして登場したのが巫俗信仰である。特に、一九六〇年代以降に現れた民族主義は、韓国伝統文化を前面にだすようにした急転換時期の産物でもある。

このような本国の事情とは違って、在日韓国・朝鮮人の社会に巫俗が登場した年代については、まだ正確な資料がなくその全様を摑むのは難しい。大阪においてクッが流行するようになったのは、信者の話から一九六〇年代末か一九七〇年代の初めころと推測される。このことは、時代的な背景などを考慮に入れての考察が今後の課題として残されている。

在日韓国・朝鮮人一世は、韓国でも下層階級に属していた人々が流入して、あるいは、強制連行によって日本に来ている。彼らは、日本社会で生き残るために厳しい生活を強いられてきた。日本社会が経済的に恵まれてきた段階では、文化変容が進み、同時に在日韓国・朝鮮人は日本に定着していった。彼らは内面的には韓国的伝統と文化を再吟味しながら充実化をはかってきた。つまり、韓国が文化的に優れているという誇りをもち、特に、先祖崇拝などで民族的アイデンティティの再確認をはかっていると言える。その典型的なものの一つが巫俗文化である。

フィッシャーによると、小数民族がある地域で一定数以上の人口（臨界量）に達すると、自らのアイデンティティを再確認し、民族的伝統に立脚した固有の文化を創造する運動が成立するという。そしてそれは同化過程とは矛盾せず、むしろ同時進行的に展開されるものであると主張している。[24] 在日韓国・朝鮮人の社会は地域によるばらつきがあるので一言でまとめるのは難しい。しかし、大阪を中心にする地域では、固有の文化を展開しうる十分な条件が備わっていると思われる。その一端として巫俗信仰の機能を位置付けることができると思われる。

むすびにかえて

本稿では、在日韓国・朝鮮人の社会に於ける巫俗信仰の概要に焦点をあてて考察してきた。論考の発端は、在日韓国・朝鮮人の社会で巫俗信仰が流行しているのは、如何なる社会的な背景があるのか。そして、巫俗を通じて何を求めているかである。考察の結果幾つか明らかになったのは、この事柄は単なる民間宗教としての機能だけではないということである。

在日韓国・朝鮮人の社会は、その形成史からも分かるように、他者によった強制的につくられた。そこで彼らの社会は、日本の中の下位文化として扱われ続けてきた。当然のことながら、彼らは自分

たちのアイデンティティの再確認のために、一世を中心にネットワークを形成し、巫俗に訴えてきている。それは巫俗の在り方に、仏教とのシンクレティックな現象としてあらわれる。そこには、韓国的な要素や日本的な要素、そして独特の要素とに分けられる。このように、巫俗信仰から現世利益思想と民族的なアイデンティティの再確立をはかっている機能をもみることができるといえる。

本稿では、主に大興寺を中心にする巫俗信仰の事例であったが、今後はキリスト教など、在日韓国・朝鮮人の生活史を中心にもっと幅広く考察して行きたい。こうした課題は、在日韓国・朝鮮人の社会が一世から二世・三世へと重要な意味を含んだ世代交代を経験しつつある現在、巫俗信仰の継承や創造の過程を追い、分析するという継続的な研究がもっとも求められるものであると言えよう。また、在日社会だけではなく日本社会を理解するためにも大いに有意義であると思われる。

注

(1) M. Eliade 著／前田　耕作訳『宗教の歴史と意味』一九八七年、せりか書房、二〇一頁
(2) 玄　容駿『済州島巫俗の研究』一九八五年、第一書房、八三－一〇七頁
(3) 許　点淑『在日韓国・朝鮮人における巫俗儀礼』一九九二年、大阪大学修士論文、第三章参照
(4) 황루시『韓国人 의굿과 무당』一九八八年、文音社、一三頁
(5) 玄　容駿、上掲書、三六頁
(6) 宗教社会学の会編『生駒の神々 ――現代都市の民俗宗教 ――』創元社、一九八五年、二四九頁
(7) 梁　永厚「『在日』のシャーマン」『三千里』三〇号、一九八二年、九七頁
(8) 泉　靖一『済州島』一九七一年（第二刷）、東京大学出版会、二六七頁
(9) 宗教社会学の会編、上掲書、二三七頁
(10) 飯田　剛史『在日韓国・朝鮮人社会における仏教および民俗宗教寺院の諸形態』富山大学日本海経済研究所研究年報第xv巻、一九九〇年
(11) 許　点淑、上掲論文、一・二・二参照
(12) 宗教社会学の会編、上掲書、三三、二三七頁
(13) 宗教社会学の会編、上掲書、三二頁
(14) ここに挙げている数字は、宗教社会学の会編の上掲書をもとに統計を出している。
(15) 宗教社会学の会編、上掲書、二四九、二七四－二九二頁
(16) 石川栄吉他『文化人類学事典』引文堂、一九八七年、三七五－三七六頁
(17) 佐々木　幹「『シンクレティズム』の概念と問題点」『文化人類学3特集＝宗教的シンクレティズム』アカデミア出版社、一九八六年、一六－一七頁
(18) 伊藤亜人「正統性と土着性 ――朝鮮民族文化と現代韓国におけるシンクレティズムの様相 ――」『文化人類学3特集＝宗教的シンクレティズム』アカデミア出版社、一九八六年、一四三頁
(19) I・M・ルイス著／平沼孝之訳『エクスタシーの人類学』法政大学出版局、一九八五年、二六頁
(20) 宗教社会学の会編、上掲書、二四八－二八九頁
(21) 村武精一・佐々木　幹編『文化人類学』有斐閣（Sシリーズ）一九九一年、二三六頁
(22) 原尻英樹『在日朝鮮人の生活世界』一九八九年、引文堂、一一頁

(23) 原尻英樹、上掲書、一一頁
(24) C・S・フィッシャー／奥田道大、広田康生（編訳）「アーバニズムの下位文化理論に向けて」『都市の理論のために』多賀出版、一九八三年

Shamanism of Korean-Japanese
— syncretism of Shamanism and Buddhism —

The motivation of raising the argument in this thesis is based on questining how social background exists with the spread of 'shamanism' in Korean-Japanese Society, and rethinking what is expected through the study of shamanism as well.

Here, shamanism's meaning and function will be investigated. Besides being as a secularized interest in religion, sorts of functions in measuring the reformation of their ethnic identity will also be considered as well.

The question will be found interesting because of the difference between Korean-Japanese Society with the special character of the syncretism of Shamanism and Buddhism in Korean Temple in Japan, with factors which related to Korea and Japan as well as any original factor which is going to be examined in details. And this has served as the main purpose of this thesis.

Three events taken place in DAIKOUZI of IKOMA mountain district are going to be investigated. From the stondpoint of the client of GUT, different types of client will be classified according to their purposes motivations and related backgrounds throughout the life history collected and studied in field research.

Finally, throughout the discussion of meanings and functions of shamanism in Korean-Japanese Society, a typical character of Korean-Japanese can be clarified with expected. Beyond the understanding of Korean-Japanese Society, the significance of studying Japanese Society should also be concerned with regard to the difference between Korean-Japanese Society and Japanese Society.

Key Words

Koren-Japanese, syncretism, shamanism, ethnic identity, Buddhism